

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：24302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590229

研究課題名(和文)「特定の親密な友達」の形成が行動制御困難な幼児に与える影響についての実証的研究

研究課題名(英文) A Study on the Relationship Between the Formation of Close Friendships and Changes in Behavior :Focusing on Children with Difficulty in Behavior Control

研究代表者

服部 敬子 (HATTORI, Keiko)

京都府立大学・公共政策学部・准教授

研究者番号：70324275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、行動制御が困難な幼児に焦点をあてて保育園での参与観察を行い、親密な友達関係の形成と行動の変化との関連について検討した。研究1では、A児に関して収集されたエピソードを分類し、月別割合について2検定を行い、「トラブル」が減少し始めた時期にA児が「対等で親密」な友達関係を形成していたことが判った。研究2では行動問題が目立った4名に関わるエピソード記録の分析を行い、対象児が関心をもてる遊びが展開された時期には行動上の問題が減少したが、その間に親密な友達ができなかった2名には再び行動問題が現れ、グループ活動や小集団での遊びを通して親密な友達ができ、1名は問題行動が激減したことが判った。

研究成果の概要(英文)：This research explored the relationship between the formation of close friendships and changes in behavior at a nursery school, focusing on children with difficulty in behavior control. In study 1, the behavioral episodes of Child A were categorized and differences in the monthly occurrence rates of episodes were analyzed. Results revealed that the establishment of 'equal and close' friendships coincided with the period when a decrease in problem behavior started to be observed. In study 2, episode records were analyzed for four children who had clear behavioral problems. Results showed that during periods when the children were engaged in activities that interested them, there were fewer occurrences of problem behavior. However, in two children who did not form close friendships, problematic behaviors recurred after the initial improvement in behavior. One child who did establish close friendships through small-group activities exhibited a sharp decrease in problematic behavior.

研究分野：発達心理学、保育学

キーワード：幼児 行動制御困難 親密な友達 集団づくり

### 1. 研究開始当初の背景

近年、発達障害の疑いや家庭環境の問題など複合的な要因により保育場面で「気になる」子どもがクラス内に複数存在するケースが多数あるとの調査報告がなされ(黒川,2012)、今後もこうしたクラスにおける子ども集団の指導方法を実践のなかで検討していくことが求められている。指導困難に陥る子どもの行動特性としては、他の子どもへの衝動的な乱暴行為、「注意の言葉かけ」への反応や行動改善が乏しいことなどが挙げられる。こうした問題行動に対する対応方法として野呂(2006)は、「事後的対応」よりも、「予防的対応」「前向き対応」の効果、重要性を指摘している。

本研究では、これらの対応を包含する指導方法として、「特定の親密な友達関係の形成」に着目する。3歳の段階において特定の相手との間に親密性を築くことは、大人との1対1の関わりに類するものとして、同年齢他者との関係形成への移行を促進すると同時に、4,5歳代での集団の一員としての関係へ発展する際の基盤になる(高櫻,2007)。援助行動や謝罪行動は、子どもが「特別な存在」と認める親密な友達関係において生じやすく(高櫻,2007、中川・山崎,2004)、相手に「見て」と求め、互いに見せ合って共感したり評価したりすることが多い(子安・服部・郷式,2000)。こうした特定の親密な友達関係の形成が、「注意の統制」(高木,1981)による「見る」力の質的な変化、及び、他者の心の理解面での大きな進歩(木下,2008ほか)と密接に関連し、近年注目されてきた「4歳ごろの質的变化」をもたらすと考える。また、自己制御力は、特定の親密な相手との関係における限定的な場面で発揮され始め、4~5歳にかけて因果関係の認識や必要性の判断に基づいて普遍化し始めると考えられる(日本発達心理学会自主シンポ,2008)。「気になる」子どもたちの場合、その行動特性ゆえに親密な友達関係を築きにくく、そのことがまた、「見る」力や行動制御力の発達上の困難さを助長していると考えられる。

集団遊びに「入れる」、注意を「向けさせる」ことを主眼とする個別・直接的な指導に限界を感じている保育者に対して、「仲良しの友達ができる」ということと行動制御力との関係が明らかにされれば、「遊びを通しての総合的な指導」に立ち返って楽しい保育を追究していく契機となるのではないかと考えて本研究を行うこととした。

### 2. 研究の目的

保育場面で他の子どもへの乱暴な行為が目立ち、注意力の面で指導が困難な子どもに焦点をあてて、意図的に「特定の親密な友達関係」を形成する有効な指導方法と、そうした関係が形成される前後における行動上の変化を明らかにする。

### 3. 研究の方法

【研究1】K市内保育園4,5歳児混合クラス(4歳児6名、5歳児7名)で週1~2回午前中と夕方に「広汎性発達障害」の診断を受けていたA児(5歳児)に焦点をあてて参与観察を行い、筆記によって収集されたエピソードの分析を行った。

【研究2】京都府下の公立保育所4歳児クラス27名(全盲重複障害児1名、自閉症スペクトラム児1名、発達の遅れ4名、発達障害の疑い3名、6月から養護施設通所児H子が入所)担任3名+1名。衝動的な行動問題が顕著だったY男・K男(発達の遅れ:推定発達年齢3歳前半)、T男・S男(発達障害の疑い)に焦点をあてて、月に3回程度(月水金のいずれか)9時~午睡前まで参与観察し、休憩時間に合わせて担任とカンファレンスを行った。

### 4. 研究成果

#### 【研究1】

(1)対象児:A児。5歳児、10月生まれ。入園当初から、落ち着きがなく動き回り、はっきりと喋るが会話として成り立たなかったり、オウム返しのように聞き返したりすることが多かった。絵本等は見えてもらえない。一つのことに集中できずにすぐに部屋から出て行くことも多かった。他児を突然叩く、蹴る、他児の遊んでいる物を取っていく等、トラブルが多発していた。しかし、人懐っこく、誰にでも話しかける面もある。衣類の着脱、排泄等の身辺自立は確立していた。

#### (2)A児のエピソード分類割合の変化:

6月~11月までのエピソード数は、63、76、34、68、84、64であり、それらを「トラブル」(他児を泣かす、他児の物を取るなど注意や仲介が必要な場面)、「良好な関係」(楽しく遊ぶ、譲歩するなど)、「その他」(互いの思いが食い違って遊びがかみ合わない、相手から拒否されて遊べないなど)の3つに分類して月別に割合を算出し(図1)  $\chi^2$  検定を行ったところ有意差が認められ( $\chi^2=41.23, df=10, p<.001$ ) 残差分析の結果、5%水準で「トラブル」は6、7月に多く10、11月に少ない、「良好な関係」は10、11月に多い、「その他」は7月に少なく11月に多いことがわかった。

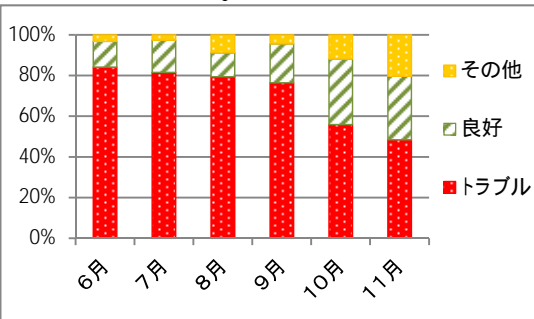


図1 A児の月別エピソードの分類割合

(2)A 児の「親密な友達関係」形成過程における変化

収集されたエピソードの数から A 児との関わりが多いと考えられた 3 名に着目して関係の変化をみた。

それぞれの友だちとの特徴的なエピソード例 (0 は観察者)

<B 男 (4 歳児、9 月生)>

A 児に暴力を奮われても、泣くだけの子どもや「やめて」と言う子どもがほとんどであるが、B 男は一学年下ながら取っ組み合いの喧嘩をしている場面も見られた。夏ごろからは A 児が B 児と「遊びたい」気持ちが強すぎてトラブルになることを A 児自身が表明するようになった。(【ep. B-1】)。11 月には叩かれても取っ組み合いになっても、二人とも笑って楽しんでいる姿も見られ、A 児が B 男を泣かせてしまった後に「ごめん」と謝る場面も多く見られるようになった。トラブルが多い二人ではあるが、B 男は【ep. B-2】にも見られるように A 児の良い所もきちんと見ており、そのことも A 児とのかかわりに繋がっていた。

【ep. B-1】8/27 [朝の自由時間]

0 がうんでいて E 児、F 児、G 児と遊んでいると、A 児が「鬼ごっこしよ」とやって来る。0 が人差し指を差し出すと A 児は『この指止まれ』を歌い出す。B 児が寄ってきて、E 児も寄ろうとするが、A 児は「E はあかん」と言って寄せない。E 児 (B の弟) は「B お兄ちゃんと鬼ごっこする」と乗り気だったので、「いいやん」と 0 が言っても、「小さい子はあかん」と A 児は言う。「じゃあ E は 0 先生と一緒にするし」と言って、鬼を決めようとした時、突然 A 児が B 児の足を踏んで、B 児が泣き出した。B 児は怒って A 児を叩き返す。A 児もさらに叩きそうになったので 0 が間に入って止めていると、それを見ていた U 先生が来て A 児をつれていった。(中略) 0 がおもちゃ置き場でおもちゃを片づけていると A 児が来て、0 の膝の上に座る。A 児「A、ほんまは B としたかったんや」。(後略)

【ep. B-2】11/11 [昼食後自由時間]

(前略) A 児が「車ごっこするもんこの指止まれ」と歌い、B 児と I 児は指に止まる。おもちゃ入れの籠を車に見立て走り出そうとするが、籠は二つしかない。向こうで遊んでいる M 児が籠を持っているのを見た A 児は「ちょっと行ってくるわ」と大量のスコップを持って M 児の所へ。何か会話を交わし、すんなりと籠とスコップを交換して帰ってくる。その様子を見ていた B 児に Z が「A、ちゃんと交換できてえらいな」と言うと、「俺、そういうところが A 好きやねん」とニコニコして言っていた。

<C 男 (5 歳児、1 月生)>

C 男は手先が器用で折り紙が得意、サッカーや跳び箱も得意な男児で、A 児は遊びたい

気持ちを強くもっていたが、C 児は A 児を避けていた。面と向かって対立することはなかったが、9 月に初めて C 男が A 児の勝手な行動に怒ってつかみ合いのケンカになった(【ep. C-1】)。その時に周りの友達から責められた A 児が C 男に初めて謝った。その後、A 児が何度も C 男を誘って鬼ごっこで C 男が来るまで待ち、「C と鬼がしたい」と言うようになった。C 男も A 児が足が速いことを認め、二人で鬼をする時は挟み撃ちの作戦を立てる等、協力する姿もみられるようになった。

【ep. C-1】9 月 8 日 [おはよう]

(ケンケン相撲をしていて) A 児が U 先生に「C が押さはった」と言う。C 児は「押してない」と言う。A 児は一度外に出るが、もう一度中に入ってやり始める。次々とみんなが抜けていく中、最後まで残っていた C 児を、A 児が突然押し、C 児は足をついてしまった。C 児は怒って、つかみ合い叩き合いの喧嘩をし始めた。A 児がきつく C 児を叩き、C 児は泣き出す。U 先生は「せっかくみんなで楽しく遊んでたのに、そんなことする人あかんわ!」と普段より厳しく怒る。すると、B 児も「そんなことしたらあかんやろ! A がやりたいって言っても誰もやってくれへんかったらどうすんねん!」H 児・L 児「もう遊んだげへんしな!」I 児「怖くないし!」等、こぞとばかりにみんな怒っていた。みんなに散々言われても、最初は「そんな言われても別にいいし」と反発していた A 児だったが、しばらくして「C ごめんな」と言い出す。U 先生が「聞こえた?」と C 児に聞くが「ううん」と言うので「もっかい言い」と U 先生が言うと「C、叩いてごめんな」と言って A 児は泣き出した。それで C 児にもみんなにも許してもらい一件落着。

<D 子 (5 歳児、5 月生)>

4 歳児の頃から二人で遊んでいる姿も度々見られていた。一方、標的にもなりやすく、A 児が近づくだけで泣き叫んだり逃げたり、A 児の行動に過剰に反応して泣く D 子を面白がってわざと意地悪をしたり D 子に向かったりすることも度々あった。そんな D 子が、初めて A 児に対抗した姿が見られたのが【ep. D-1】であった。「A なんかと遊んであげへんし!」等と対抗する場面も度々見られたが、D 子は自分から A 児に遊びを働きかけることもあり、さらには【ep. D-2】のように A 児をフォローすることもあった。【ep. D-4】のように、D 子に誘ってもらったり隣に来てもらうことで A 児が集団の中にすんなりと入れたことは度々あり、D 子の存在が A 児にとって支えになっている面は大きかった。

【ep. D-1】7 月 2 日 [おはよう]

A 児は、D 子と M 児の隣に座りたがっていた。しかし、直前に J 児を椅子で押ししたり、意地悪ばかり A 児はしていたので、D 子「だって A 耳元で大きい声出したやん!」「した!」D 児は泣きそうになりながらも、U 先生の顔をチラチラ見つめ A 児に対

抗する。

【ep. D-2】7月25日〔午睡前〕

最後に着替え終わったA児が蒲団を持ってきて「Hの隣で寝よー」とニタツとした表情で来る。いつものようにH児は「嫌や」と泣きそうな表情で蒲団を持って逃げる。「じゃあLの隣にしよう」とA児が言うと、L児も「嫌」と言って行ってしまふ。するとD子が「Aがかわいそうやー！A何もしてへんのに！」とA児をフォロー。

【ep. D-4】8月28日〔おはよう前〕

D児が外で三角馬を使って畑を耕す仕草をしていた。A児も三角馬を持ってそれを真似しに行った。(中略) A児は三角馬を持ったまま部屋に入ったので、V先生に「直しとこ」と言われるが「嫌」と言い、廊下でゴテていた。しかし、D子がA児の椅子を持ってきて、隣に座ろうと誘ってもらい、ようやく三角馬を置いて部屋の中に入った。

この3名それぞれとの関わりの特徴とその変化を時系列に沿って整理したところ、1) 年下B男との親密で対等な関係形成 2) 好きなのに嫌がらせをしてしまうD子からの抵抗とフォロー行動の出現 3) 撞れ的存在C男とのぶつかり合いと認め合い、というプロセスが見出された。3)の時期にはクラスの子どもたちがA児の自分勝手な言動に対して数名で注意するようになり、3)の時期を境にA児の「トラブル」エピソードが有意に減少したことが判った。

ぶつかり合い認め合うという親密対等な関係の形成が複数化していく過程で他の子どもとの関係が変化し、A児の行動制御上の変化をもたらしたと考えられる。

## 【研究2】

### (1) テーマ活動の展開とY男の変化

集団活動に加わるのが難しく、行動制御上の問題が目立っていたY男は「虫」への関心が高かったことから、「虫」をテーマに子どもたちの経験、興味・発想を活かした遊び、探究活動が計画された。その展開過程においてはY男が他の子どもたちの前に立って本を紹介し、次々とアイデアを出すなど、率先してテーマ活動に取り組む姿が見られるようになり、朝の集まりの時間にも集団の場からはずれるという行動がほとんど見られなくなった。しかし、8月に入って運動会の練習が始まった頃から、再び行動上の問題が現れ、行動を制止しようとする保育者や保護者に対して乱暴なふるまいが目立つようになった。保育者とのカンファレンスを通して、Y男が「荒れ」始めた原因として、6月から入所したH子の激しい言動の影響や行事前の緊張・不安があると考えられた。

### (2) 「親密な友達関係の形成」に着目した対象児らの変化

対象児らのエピソードを分析したところ、プロジェクト活動でのごっこ・運動遊びやグ

ループで親密な友達関係を形成できたT男、S男は安定的に集団活動を楽しむようになっていた。その一方、友達関係が深まらず行事が苦手なY男、K男は集団から外れて保育者の気を引き他児に嫌がられる行動が増えていることがわかった。

### (3) 「親密な友達関係の形成」に着目した小集団の組織化と対象児の変化

運動会終了後、担任保育者とカンファレンスを行った際、集団の組織化にかかわって以下の方針を確認した。

a) 運動会終了後、劇あそびでのグループ分けと連動させて当番活動や昼食をグループ単位で行うことにした。

b) 可能な日はグループ単位でクラス集団活動を分けて取り組むことにした。

c) 昼食後に小集団でゆっくり遊べる場所を工夫。

荒れた行動が再び目立つようになっていたY男だが、グループ単位では集団の遊びに加わり、得意なことを他児に認められることで笑顔が増え、落ち着き始めた。J男と親密になってから、少々嫌なことを言われたりされたりしても我慢するようになり、乱暴な行動が激減した(観察時間帯ではまったく見られなくなった)。K男についても小集団で盛り上がった紙ひこうき作りとバナナ鬼で、ふざけやトラブルではない友だちとの接点が増えてきた(Ep.1)。グループ活動では友達のことを考えて行動を制御したりする姿が見られるようになった(Ep.2)。

【Ep.1】(12月5日) K男、Y男、J男だけが4歳児部屋にいる。劇練習のため他の子どもたちはホールに行ったが、この3人は行く途中で戻ってきたという。フリーの保育者が一人ついている。(中略) K男とY男がB5の裏紙で夢中で紙ヒコーキを折っている。少し前にはK男とT男が紙ヒコーキを作っていたが、今日はT男は劇の練習に加わっている。Y男がとばしている紙ヒコーキについて、「自分で作ったの?」と聞くと、「K男くんに作ってもらった」とのこと

【Ep.2】(1月14日) てんとう虫Gのテーブルでは、O男、P子、Q子が早くからすっかり準備を整えて待っていた。園庭で遅くまで遊んでいたK男は部屋に入ってくるとしばらくウロウロしていたが、てんとう虫のテーブルを見て自分で気づいたように給食の準備をして席にすわった。すわるなり、お箸をもってごはんを一口パクリ。その時、前にすわっていたO男が、「あ！みんなそろってからやで。」するとK男、手をとめて、ごはんつぶが2粒ついたお箸を茶碗の上に置いた。

あと1人のメンバー、J男は砂遊びを終えてやっと部屋に入ってきたところ。O男「J男くん！早く着替えてきてー！K男くん、今きやはってんよ。」それを聞いたJ男、はっとした表情に

なり、ものすごい勢いで急ぎ始める。着替えて給食をもらって.....その間、その様子を見守りながらじっと待つあとの4人。(中略)K男がきてからずいぶん時間があつたが、K男もおとなしく待っていた。J男がイスを見つけて席につくと、4人にほっとした笑顔が広がり、自然にみんな同時にそろって手を合わせて「いただきます!!!」大声の大合唱。

以上のことから、集団活動に加わりやすく逸脱や乱暴な行動上の問題が目立つ場合に、その子どもの関心にそった集団活動を展開することが第一に重要であることが確認された。

しかしながら、それだけでは十分条件ではなく、行動上の問題が再び目立つようになる場合があり、小集団の組織化を通して意図的に「親密な友達関係」を形成する働きかけを行っていくことが結果として行動上の問題を軽減することにつながると考えられる。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

服部敬子,指導が難しい子どもたちを巻き込むプロジェクト活動の展開過程 - 親密な友達関係の形成と集団活動への参加との関連 - .日本保育学会第68回大会,2015年5月9日,椋山女学園大学 .

服部敬子・高岡矩子,親密な友達関係の質的变化と保育場面での行動制御との関係 異年齢混合クラスでトラブルが目立った子どもに焦点をあてた保育観察から .日本発達心理学会第26回大会,2015年3月21日,東京大学 .

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:

番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
服部 敬子(HATTORI, Keiko)  
京都府立大学・公共政策学部・准教授  
研究者番号:70324275

(2)研究分担者  
( )

研究者番号:

(3)連携研究者  
( )

研究者番号: